

商いが文化を育てる

鈴木紀 すずき きのこ
民博 先端人類学研究所

「文化」と「商い」。

このふたつのごとくはの組み合わせに、違和感をおぼえる方も少なくないだろう。

「商い」には「取引」や「金」など、営利重視の印象がつきまとうのかもしれない。しかし、「商い」には、それにとまらぬもうひとつの姿がある。

ここでは、アメリカ中西部の二軒の雑貨店とフェアトレード・チョコレートショップの事例を紹介する。そこから見える営利にとまらぬ「あきない」の姿とは。

街の民族学博物館

多文化を育てる商いとは、どのようなものだろうか。アメリカやヨーロッパの街を歩くと、開発途上国の手工芸品を扱う店をよく見かける。二〇一一年五月、わたしはカリブ海での調査の帰路、アメリカ中西部のシカゴに立ち寄り、郊外のオークパーク地区にある一軒の店に入った。そこはテン・サウザンド・ビレッジという、アメリカとカナダに多数の店舗を展開する企業の店だった。ゆったりとした店内には、「一万の村」という店名通り、世界各地で作られたさまざまな物が売られていた。どの商品にも小さな正札が付いていて、値段とともに生産地が書かれている。商品はジャンル別に置かれており、例えばインテリア雑貨のコーナーでは、コンゴの仮面とベルルの織物、バングラデシュのランプが並んでいた。アクセサリーのコーナーでは、フィリピンのガラスのイヤリングとメキシコの貝のネックレス

フェアトレードの効果

それではフェアトレードほどの程度効果があるのか。わたしはフェアトレード・チョコレートに着目し、チョコレート原料であるカカオの生産者の暮らしについて調べている。日本で売られているフェアトレード・チョコレートの多くは、南米ボリビアにあるカカオの生産者団体エル・セイボの豆を原料としている。エル・セイボは、アンデス高地からアマゾン低地に入植した先住民の農民たちが一九七七年に結成した協同組合である。カカオの生産、加工、出荷を協同化することにより、経営を合理化し市場競争力を着実に高めてきた。一九八〇年代からはココアやカカオ豆をヨーロッパのフェアトレード団体に輸出し、現在では、組合員数一二〇〇余り、年間一〇〇〇トンほどのカカオを生産する企業に成長している。

エル・セイボの足跡を振り返ると、フェアトレードの役割がよくわかる。第一に、フェアトレードは、生産者自身の自律的な発展をサポートする協役にすぎないという点である。外部から技術や制度をもち込んで、それを定着させようとする開発援助とは異なる。組合員にとって重要なのは、フェアトレードのルールよりも、自分たちで築いてきた協同組合の規則なのだ。逆にいえば、着実な組織基盤のないところに、フェアトレードの便宜だけをもち込んで、大した効果はあらわれないのかもしれない。第二に、経済的安定は、独自の文化的発展を可能にするという点である。例として「カカオ・フェスティバル」というイベントを挙げておこう。エル・セイボを構成する五〇近くの生産者グループそれ

レスを手にとって、技法を比較することもできる。

店のところどころに生産者のポスターが飾られており、店員に尋ねれば、さらに詳しいことも教えてもらえるようだ。さながら街の民族学博物館といった印象だ。しかもこの楽しさは、当然ながら、展示品を実際に購入できることだ。本物の博物館ではそうはいかない。

なぜ丁寧に生産地の情報を提供しているのか。それは、この店が、生産者の支援を目的とするフェアトレード（公正な貿易）をおこなっているからである。生産者が安定した所得をえられるように適正な買値と価格を設定し、最大五〇パーセントまで代金を前払いする。長期にわたり、直接的な取引をこころがけ、生産者の技術向上にも努めているという。生産者の顔が見える商品をアピールすることで、消費者の関心を引きつけようとしているのだ。

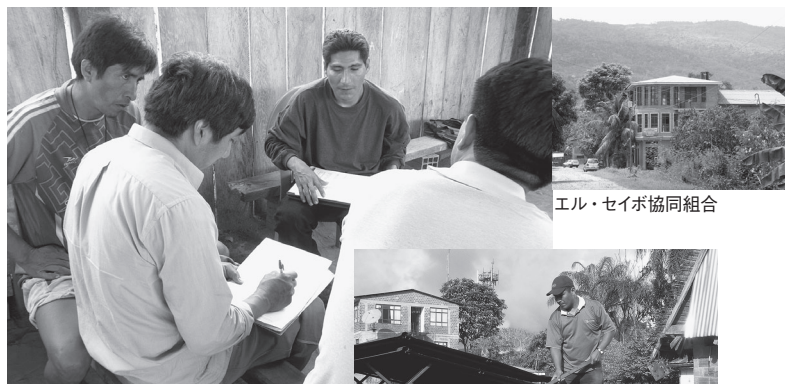
それが、工夫を凝らした芸能を披露する。組合員の世代交代が進むなか、文化も少しずつ変化する。四年に一度開催されるこのイベントでは、いわばアマゾン化されたアンデス先住民文化のユニークなパフォーマンスが繰り広げられる。

利益の社会還元

商いの目的は、物売って利益をあげることである。通常、商いは生産者・商人・消費者の三者間で成立する。商人は、生産者と消費者のあいだで、仕入れ値と売り値の差額を大きくしようと試みる。自由貿易が進展すれば、グローバルな市場競争が熾烈化し、商人は生き残りをかけて利益の確保に奔走することになる。この結果、立場の弱い生産者の収入が圧縮されたり、宣伝に惑わされた消費者が高い買い物強いられることにもなりかねない。しかし今、それとは違った発想でグローバルな商いを試みる動きが出てきている。利益を最大化するのではなく、利益の一部を社会に還元する発想だ。これにはいろいろなやり方がある。フェアトレードはそれを生産者に投資して、生産者の福祉向上を図ろうとする方法だ。この方法で、伝統的な生産技術を再興したり、環境保全を進めることも可能である。他方、社会的に困窮している人や消費者一般に利益を還元する場合もある。災害復興などの場面で力を発揮するのは、企業のこうした善意である。本コーナー「多文化をあきなう」で伝えていきたいのは、商いを基本としつつも、単に営利追求にはとまらぬ多様な「あきない」の姿であり、それによって育っていく文化の面白さである。



ボリビアの首都ラパス市郊外にあるエル・セイボのチョコレート工場



エル・セイボ協同組合

組合員に小規模融資のしくみを説明するエル・セイボ職員



カカオを乾燥させる作業

スイスで売られているエル・セイボのカカオを使用したフェアトレード・チョコレート



フェアトレードショップ店内の生産者ポスター



シカゴ近郊のフェアトレードショップ(右、上)



フェアトレードショップで販売されているコンゴの仮面